



源氏
活
花
記

會
席
式

人



源氏活花記下

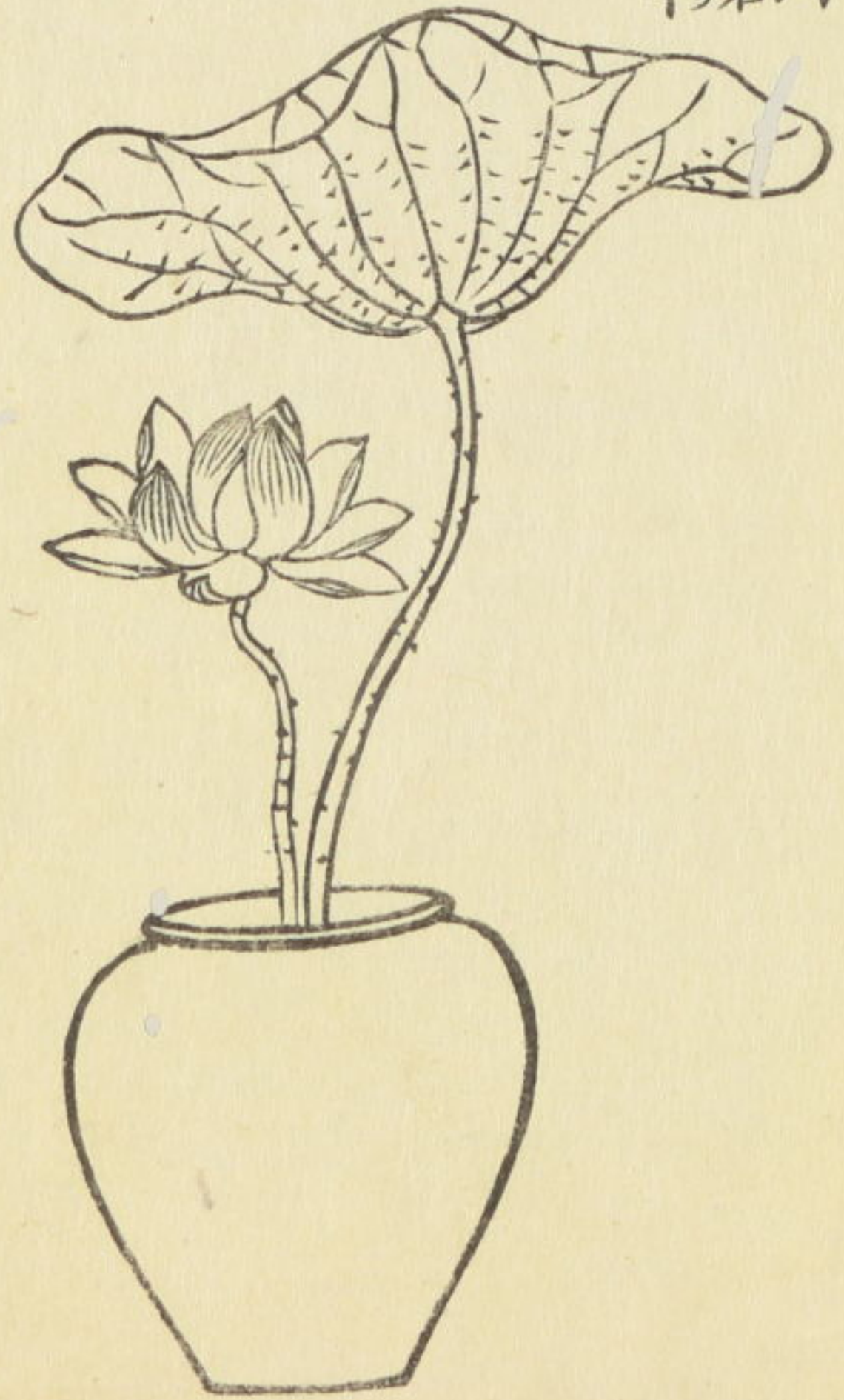
秋葉

花と沢山よまゝの船雅おあつどがけしけと賞するものあり
根よむと伐丸へうつてとり者りゆゆ言日見も偏屈して
大道にあつて山谷幽栖するもの同門室は富くたましく同命ふ
是れがめ小回首のむらむら一枝を折て餐應何をも休志かき
まじや市中にまじしむらむら珠をまじし山よま生花
まじして書院の蔵よ寂莫といふは身一とす故に雲沢山小も
生花一少存後二巻之巻の席よむ一輪よても活花一時の
宜よ降よとまじ人といふ一む沢山よ生花とくく自伐ものにハ

あらびきき蹄双林よ極りの心を伐牛て業々市店に建てる
 多命と繋ぐそのありと成の神あり人と助極あり草本
 心ありといひて涼山の埋本も世もあを何ぞをいふ
 神に林と採佛よ菊と推極ありて智と冠とや又氣性
 よて信るがむありて出生と成は只陰陽の空けつよを極あり
 と成るるも皆法とありてさうさうと一とよても出生極
 背法と成して八抱入生花の詮ありて小産安教寄屋等乃
 花形又草本乃出生不本生と分て畷画一々初人の疑惑と解せ
 一むるなり

蓮華

梵語曼陀羅華
 本名芙蓉蓮華
 荷葉と云芳華
 葉と云



好て二花一葉といけるも
 如是花の出生ありその花
 花の心ありて

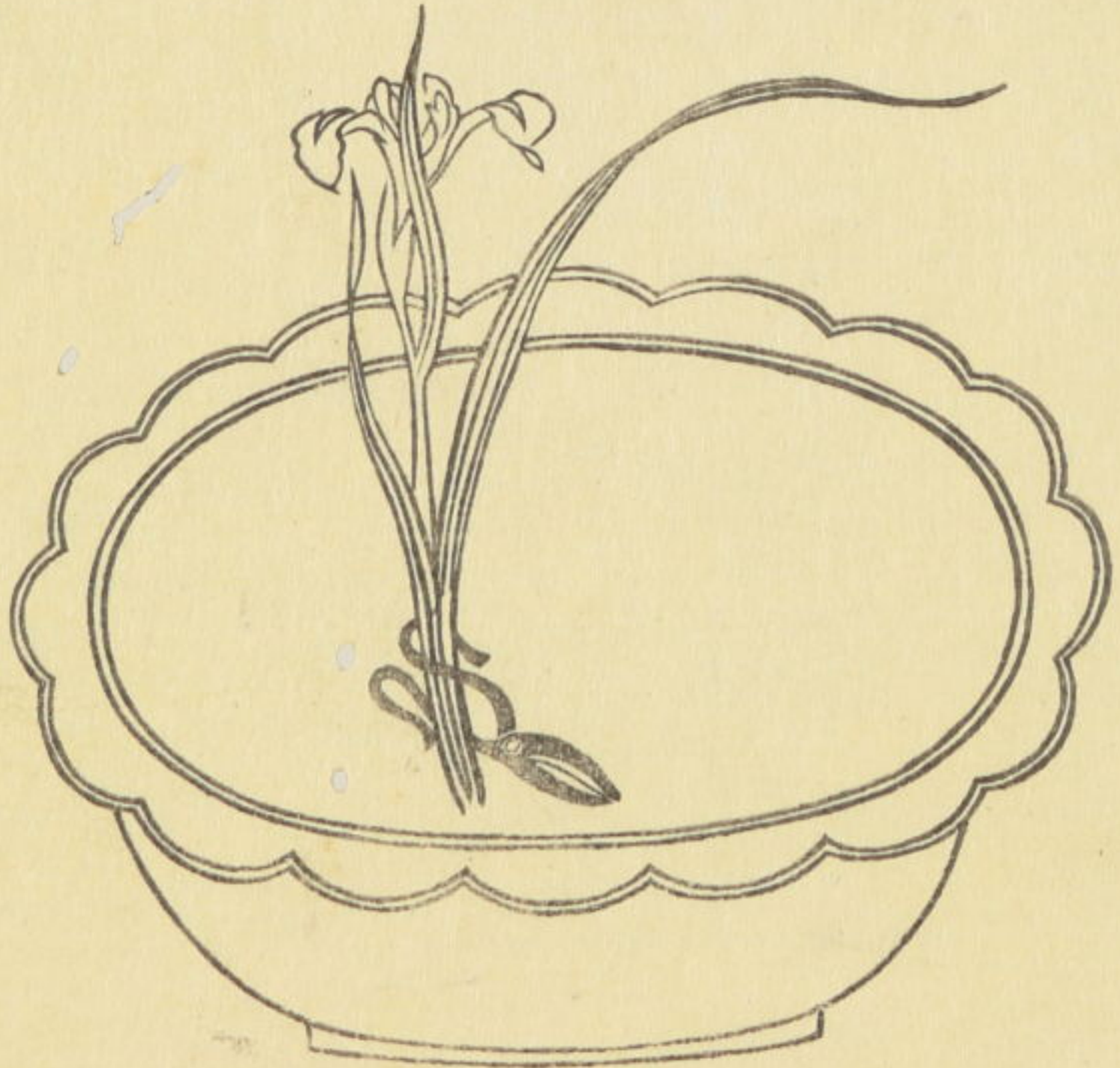
朝鮮薔薇

あけぬきも花も
数つもの花
一葉にいけるが
習わぬていける
ハハハハハハ
一、万物は下りて
大極の一点を花
と兼てして陸陽
とつけてはく小車
通例の竹や委
せく(別例あり)



東山源君

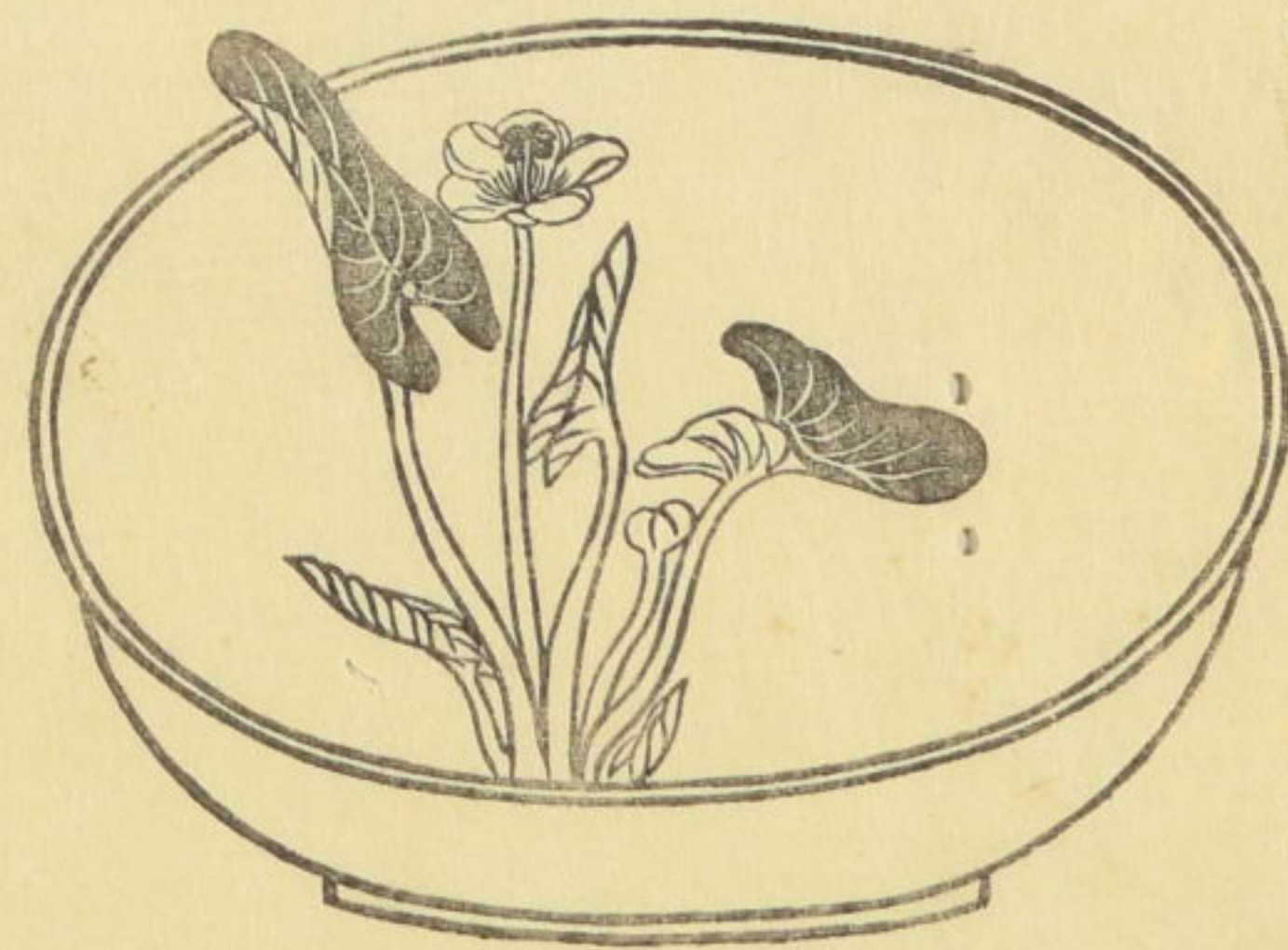
ひらやまけん
源君 沖茶にて
ゆらふ 依して大
十分に入らば花
作りしにぬるに
みどりのりと
して挿入するに
さて四葉ありし
そは母の茶の宗
小カコウといふ
ちがふまじりし
挿入花のそめり



水河骨

澤蓬草

如是大新かこに入たけ
くまふてむのりしと留



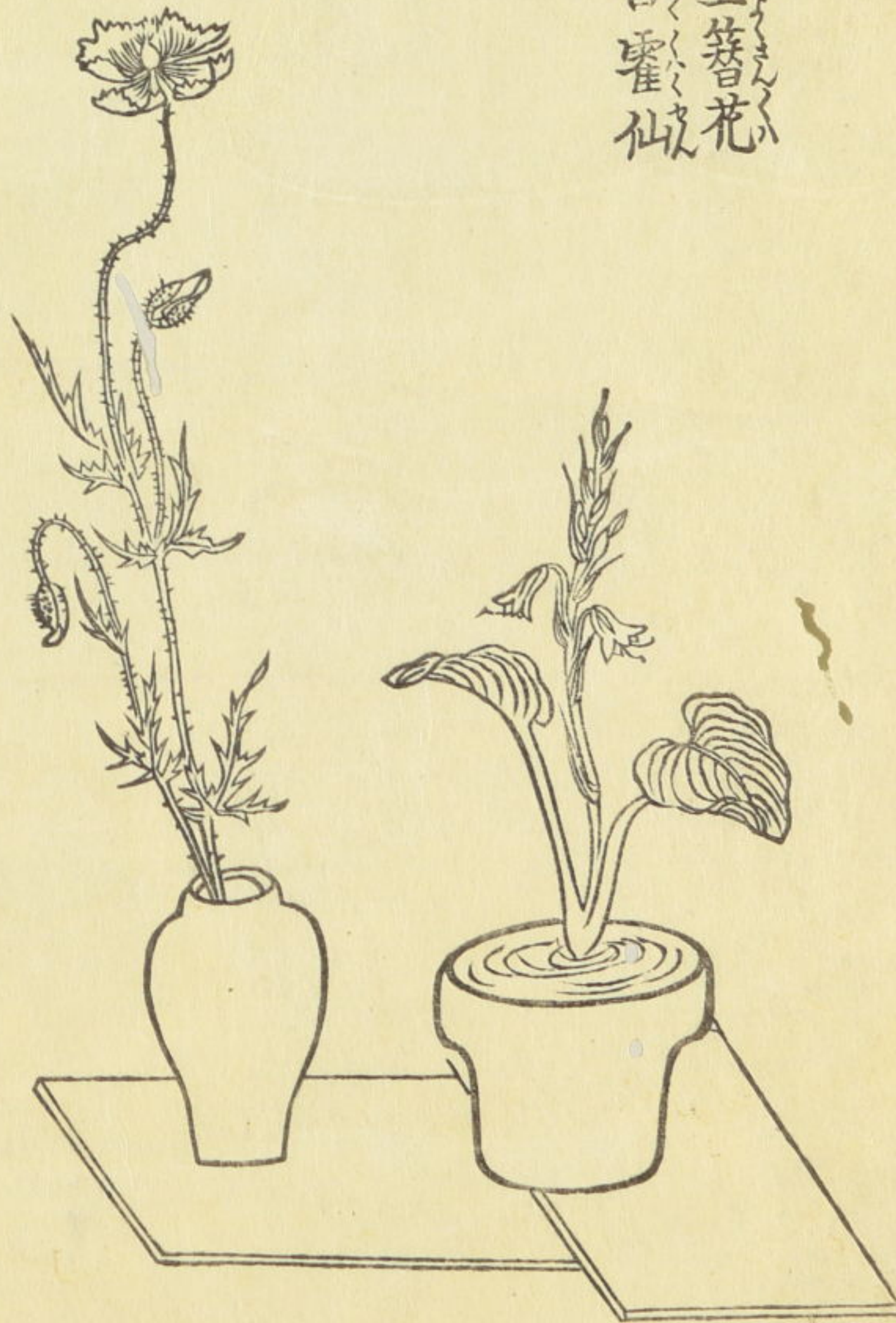
蘭草

以原は似たり
古を多とふ



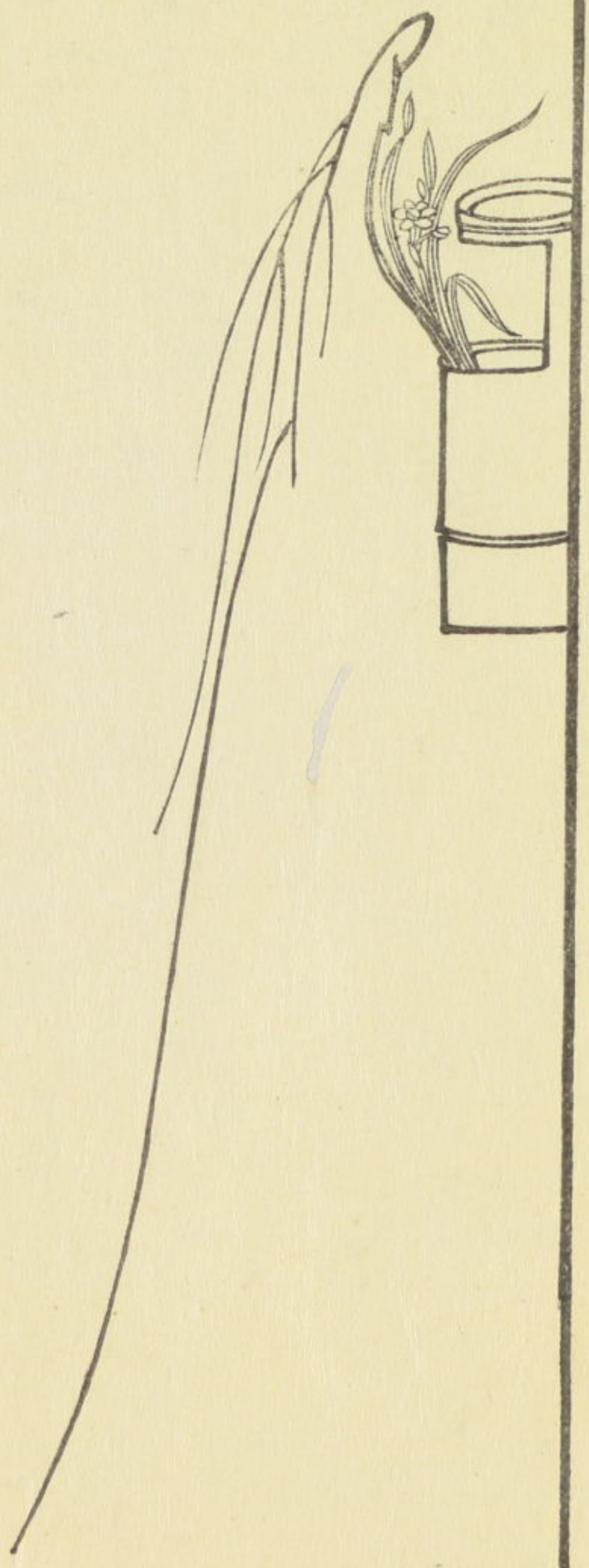
擬法珠
玉簪花
白霍仙

麗春花
花鸞
美人



一重切
水糸柳
仙

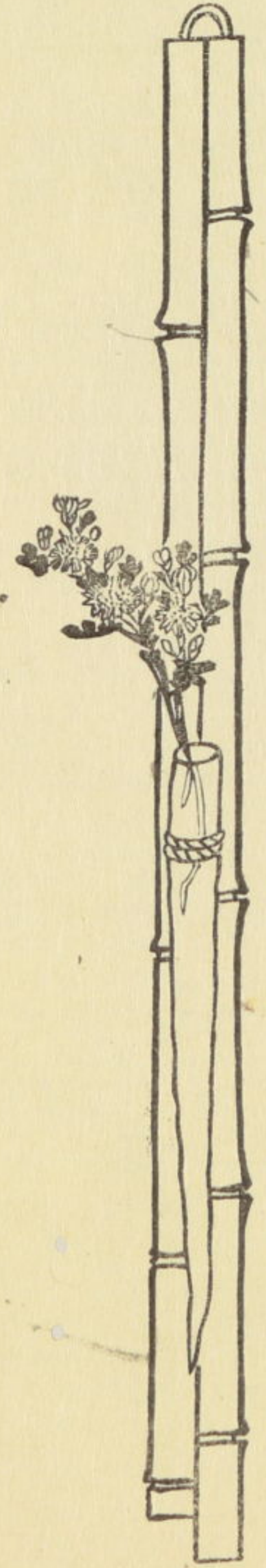
柳の葉は長く、花は白く、水に挿して置く。一重切の水糸柳は、葉が長く、花が白く、水に挿して置く。柳の葉は長く、花は白く、水に挿して置く。一重切の水糸柳は、葉が長く、花が白く、水に挿して置く。



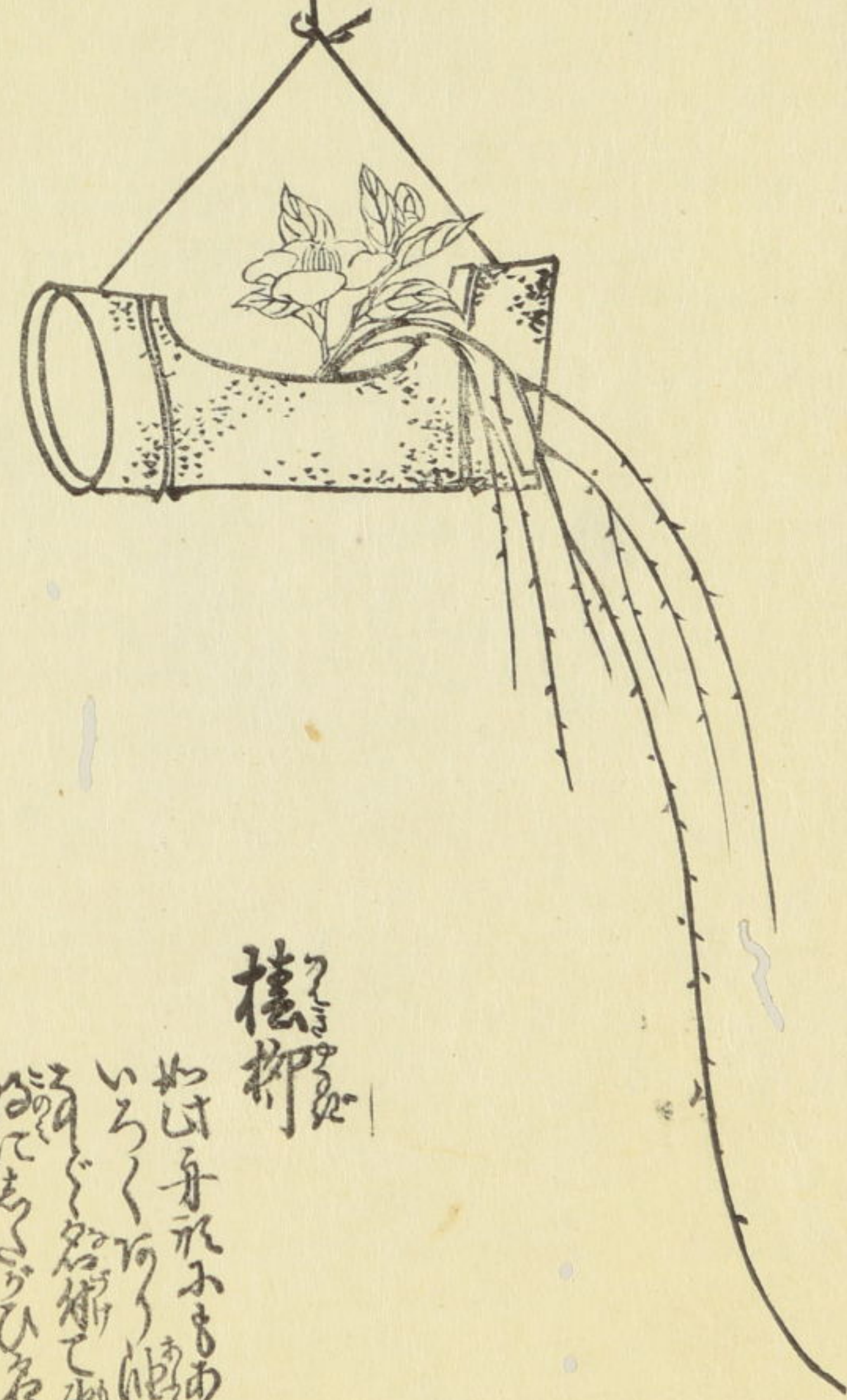
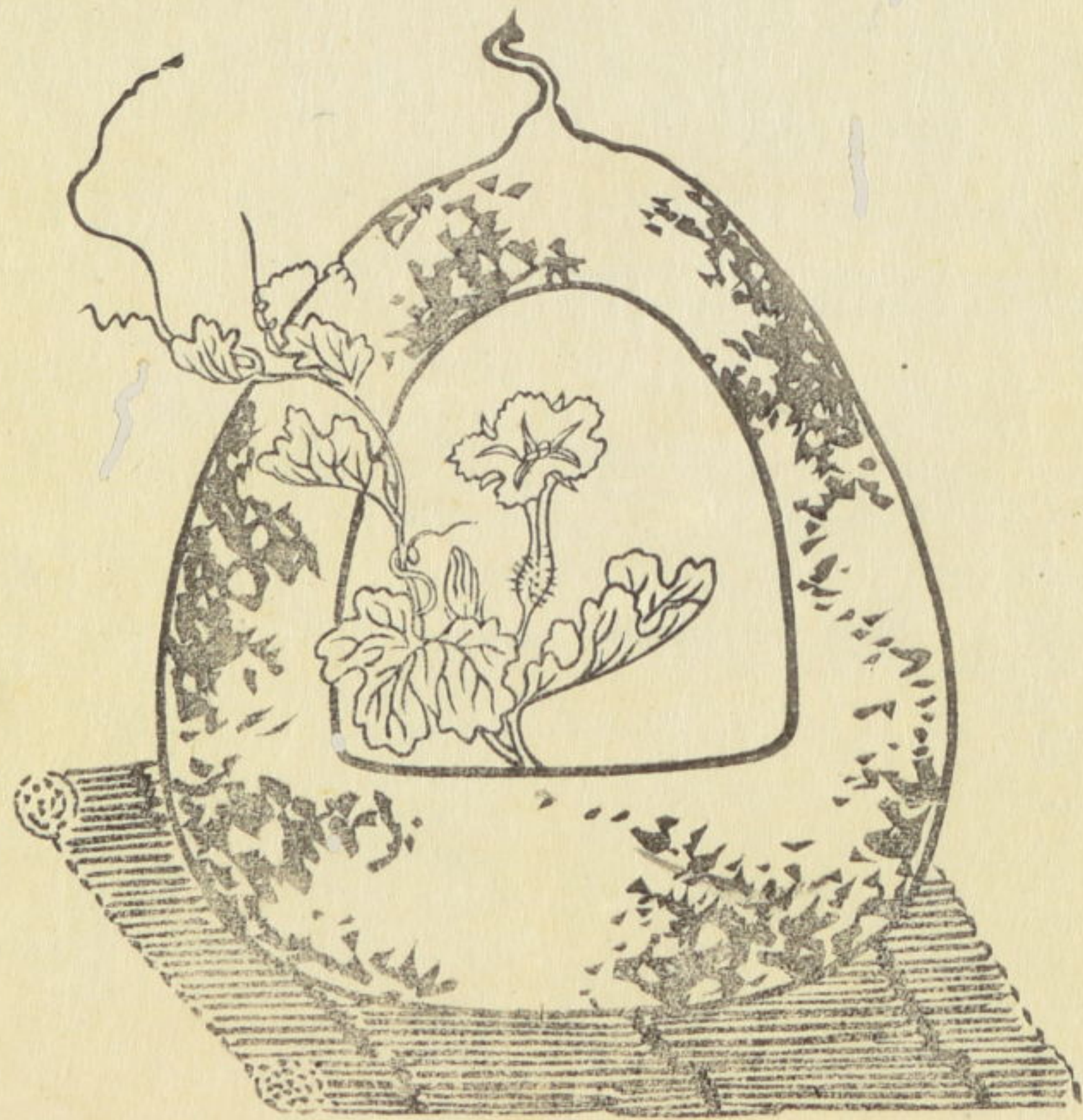
蘭石竹



初菊
花若露冰



火の
文部
古名部又部



桂柳

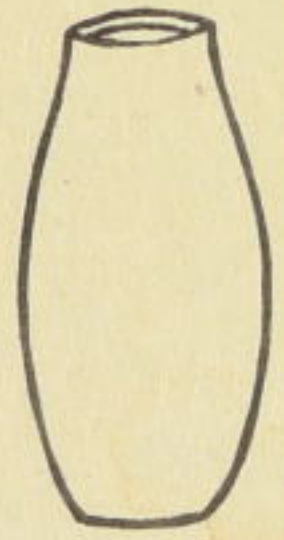
如以舟形もあらず
いろくわく他さ
清く名部ておれ用
好にあさひ名部ても
るりかすに

之重切
と連翹
中插
下水仙

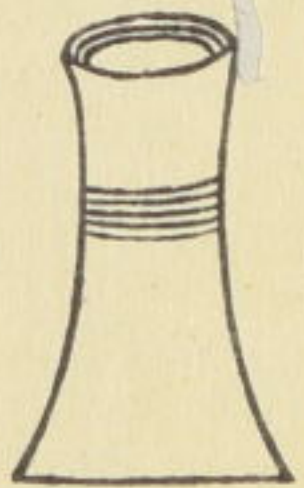


源氏花巻平口瓶乃内巻瓶不用於行更以終よ更に器

桐壺



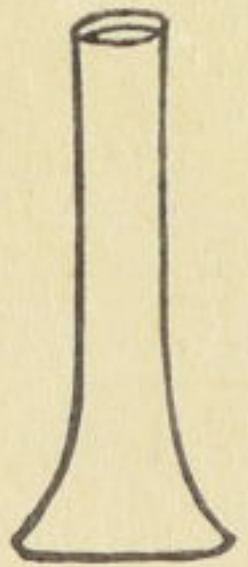
空蟬



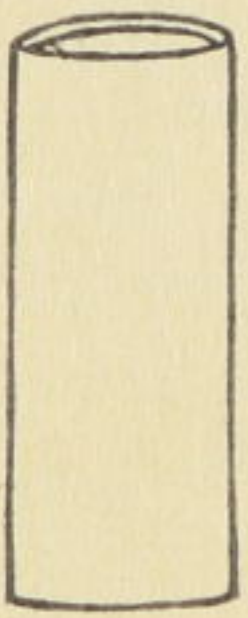
美雲



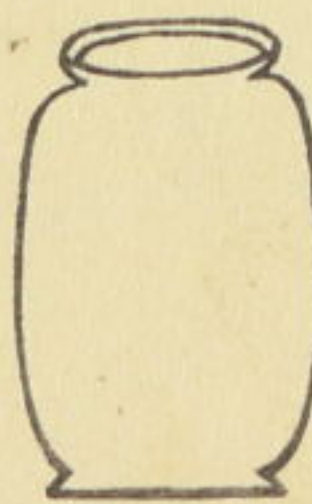
淨華



美柱

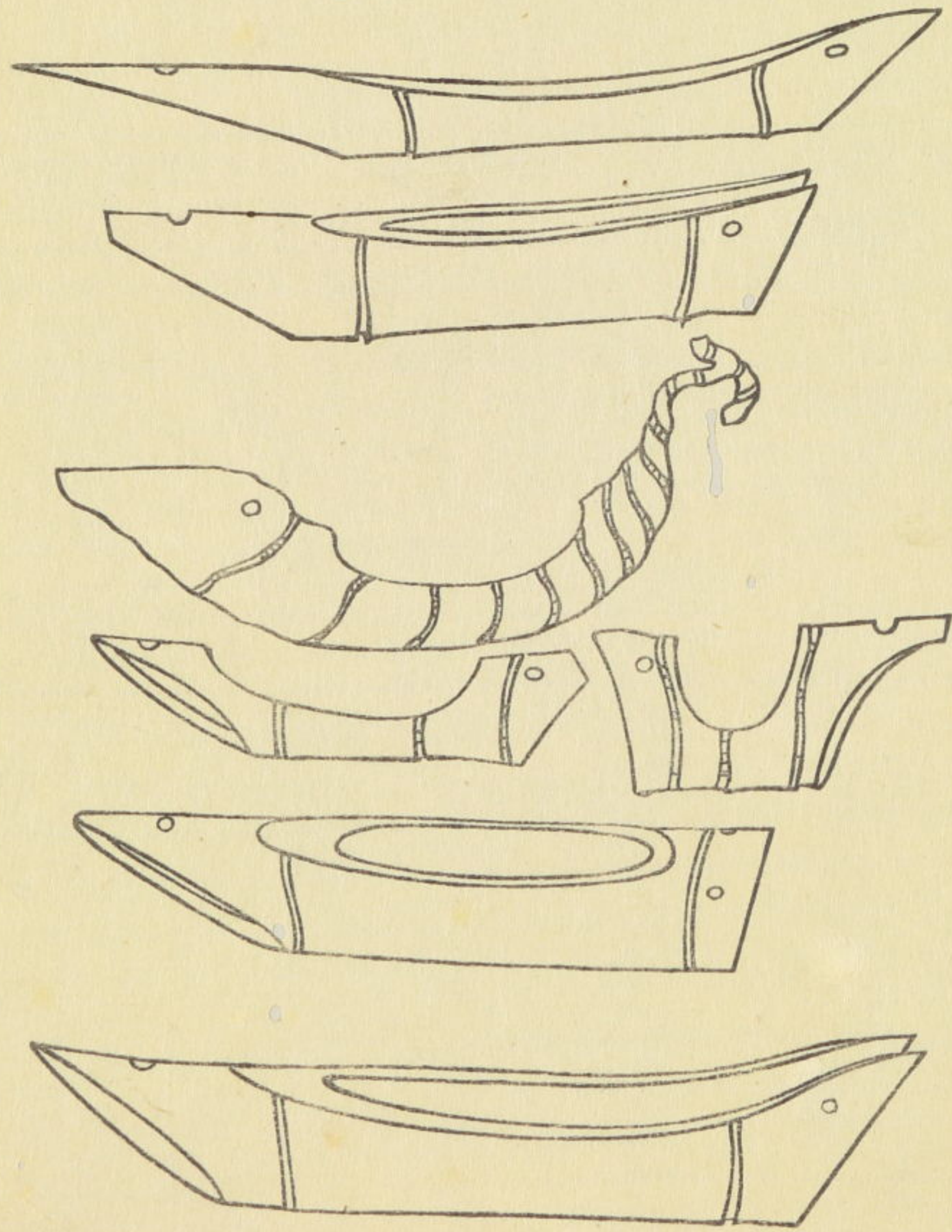


胡蝶

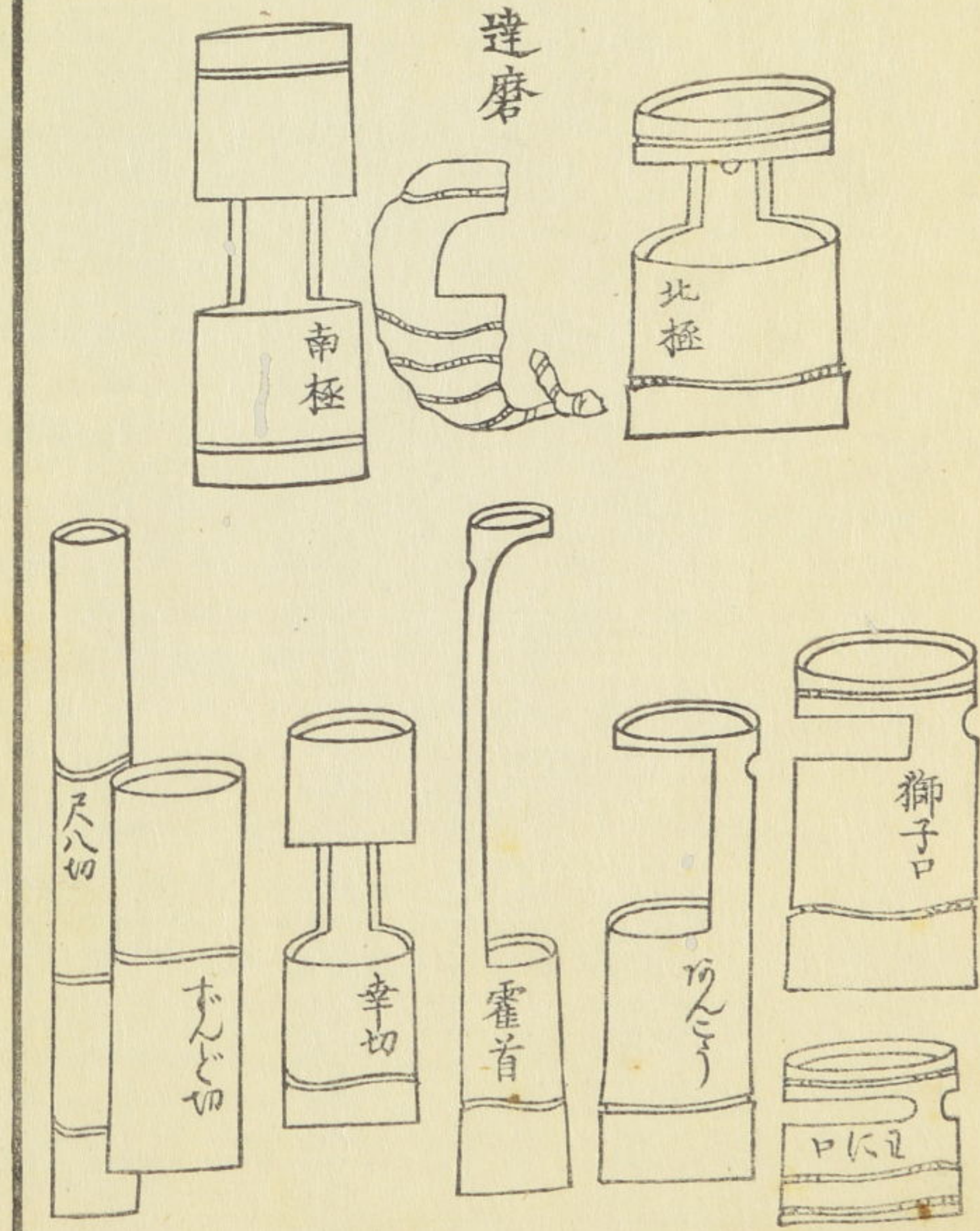


源氏花乃器器平口瓶とも悉同一也又わん合根桐快作本
陶器之器あり美の形ハ杯瓶ハるが有しその乃器形も出た大
器也一美の器ハのやけ一あり去院教奇屋ホ器器也美寸法有

船



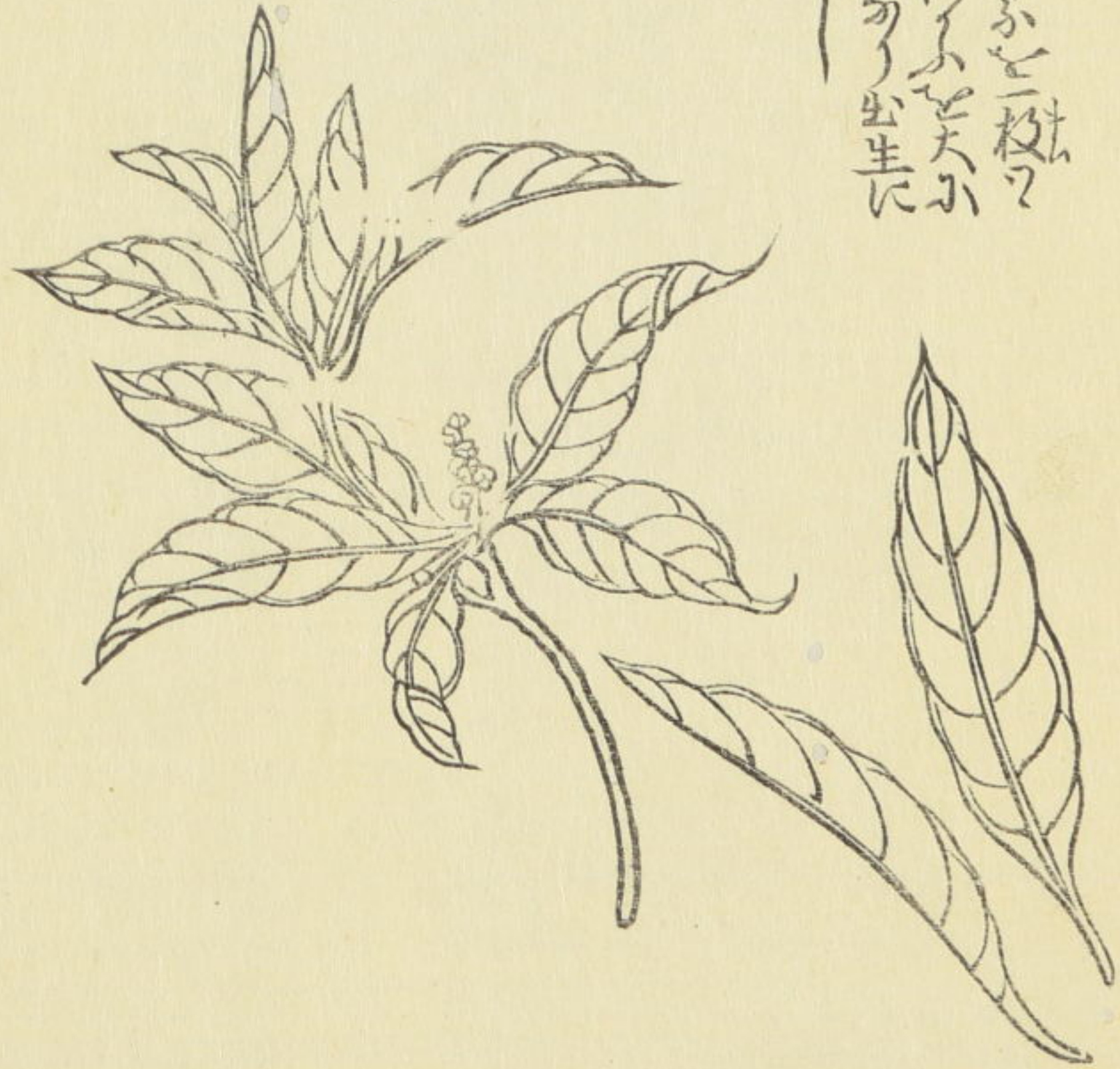
惣名三重切



枇杷

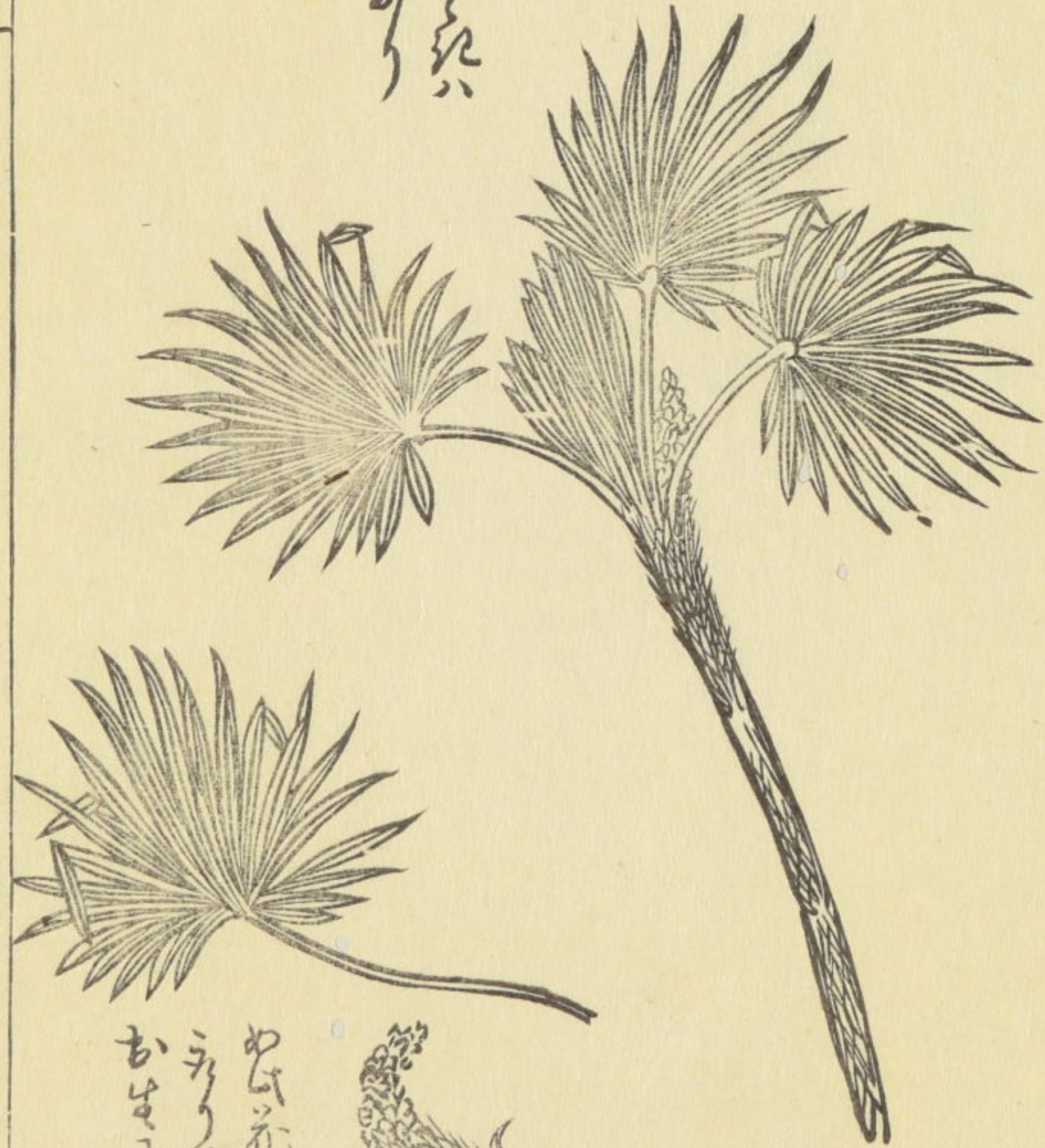
枇杷花をとり小
つゝ小葉を生かす

枇杷花をとり小
つゝ小葉を生かす
枇杷花をとり小
つゝ小葉を生かす



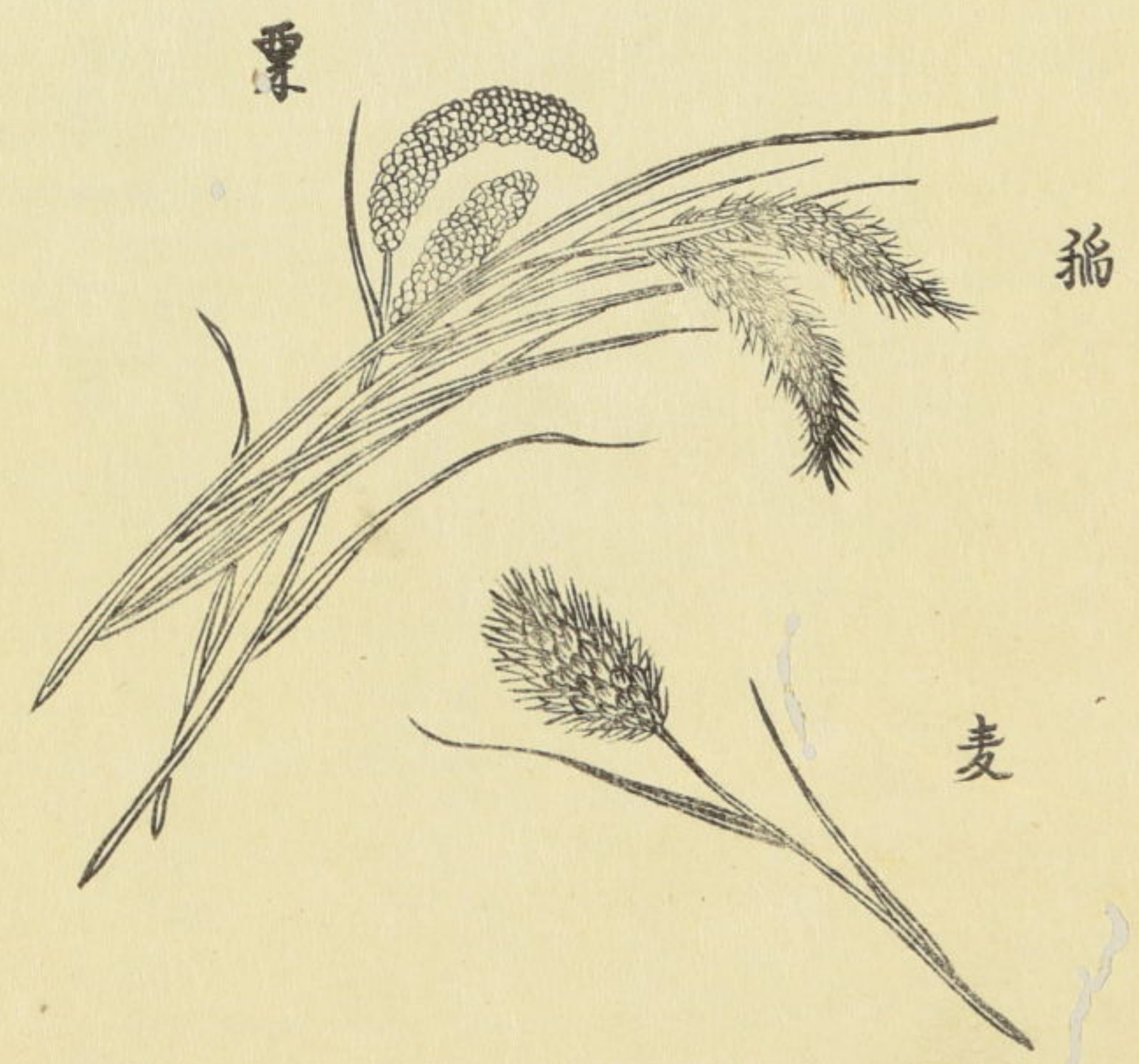
櫻桐

かしのとれハ
出さる



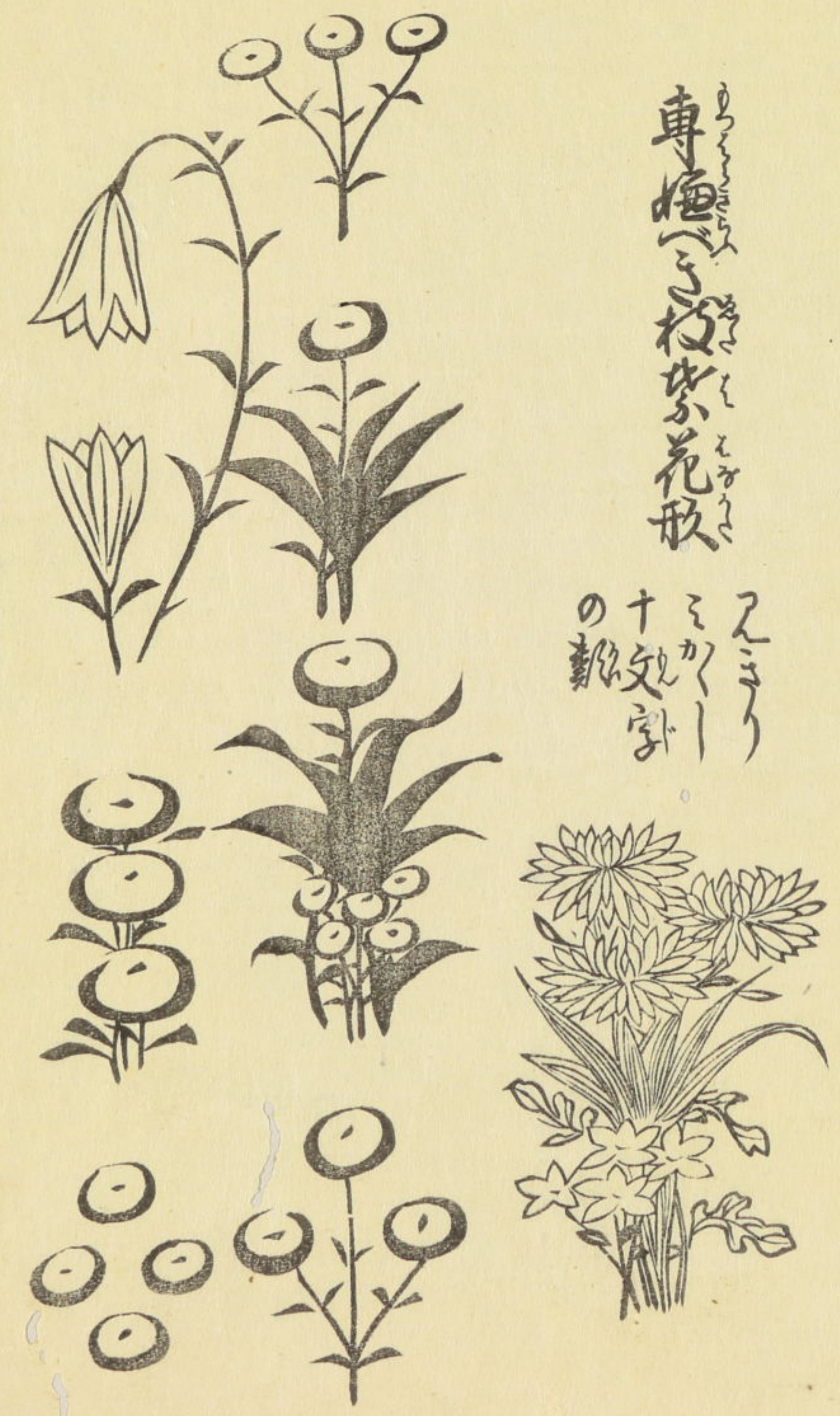
枇杷花と葉を
とりつゝハ
おほ小葉を

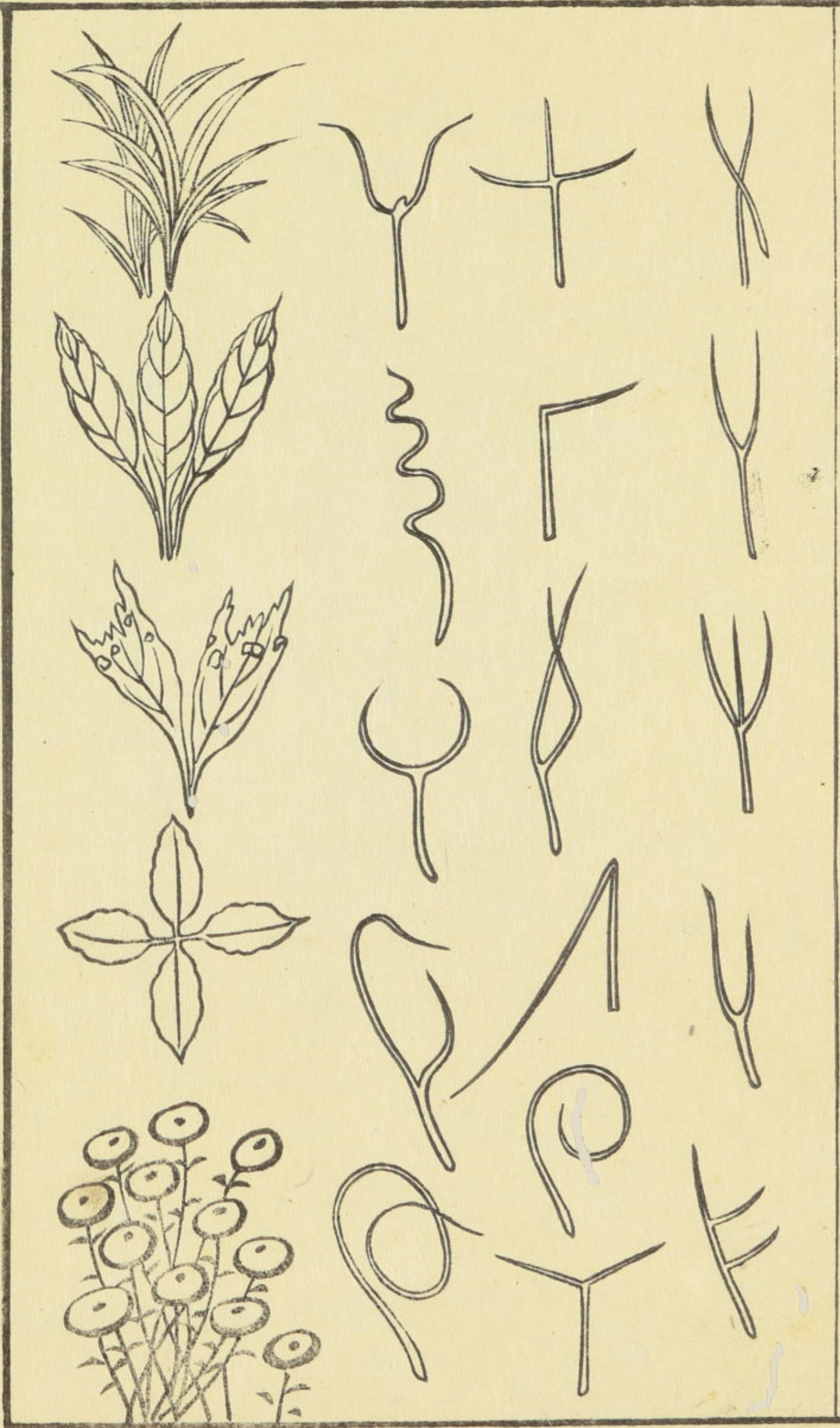
万花千草といけり... 稻穂粟粒の天穀... 神佛の供養に... 人倫の教に...



專煙... 枝葉花形

ふん... 十文... の...





專可嫌花飛花 花葉の半

書院向活花中絶して中流活花利休より茶席より少許を
 いけりち茶むらりて中流の活花いよこころぬ今世人
 判以乃むと茶席の花の葉を知らず活花は茶席の
 りとをうらむはらの多し又草木の出生もはなまご
 うつてなま木の出生不出生の花を画たよむこの花を
 當へん切見隠し十文字のまじりかきし花を破し至
 くくへん知る處あり

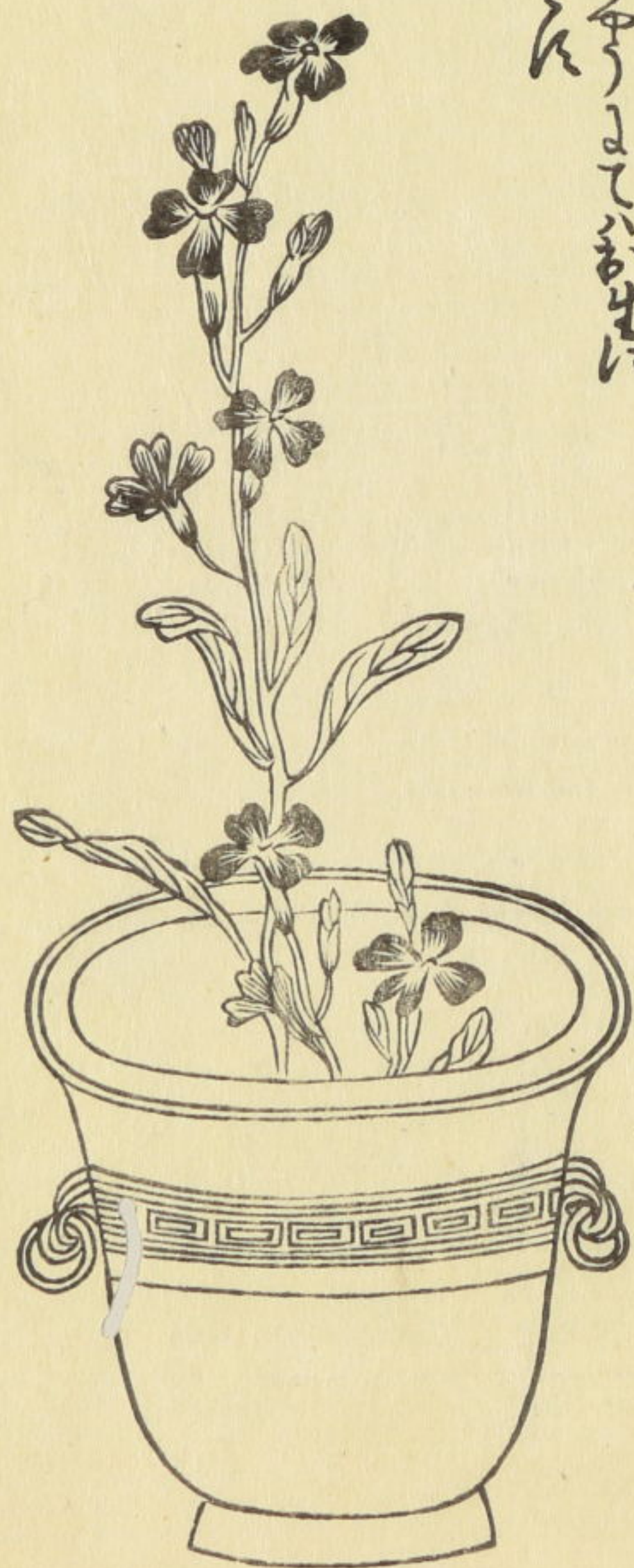
芍薬
せんだい萩 尊尾

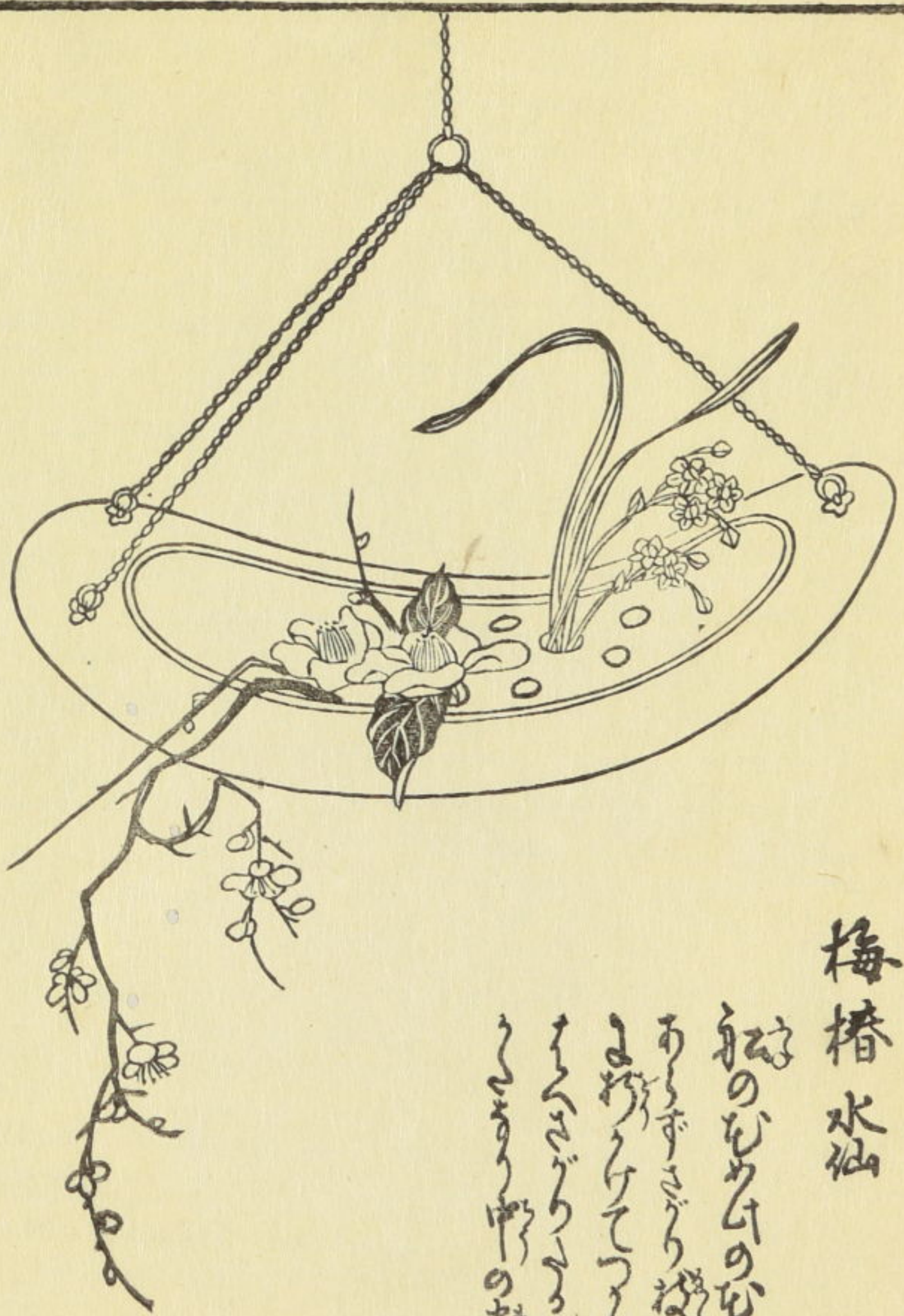
生花のちよよは砂の沖で
用ろりかへくはどしどし
けしよ二五いけるあり
二つ花のころろろろ
丁いもふお生あり



紫羅蘭花 和名あり

ゆけり版大ゆあり
癖花の心器ふあり
ちもちりよてふけに
ふかじん





梅椿水仙

船のむかしのおんけいのおのいけい
 ありすまらばなごころのちやうど
 よろしくしてつゝはなをみよす
 ことごとくはなをみよす
 ことごとくはなをみよす

跋

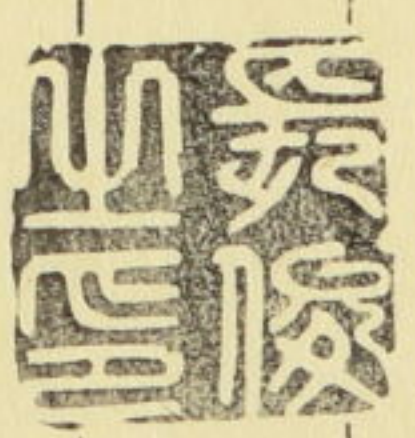
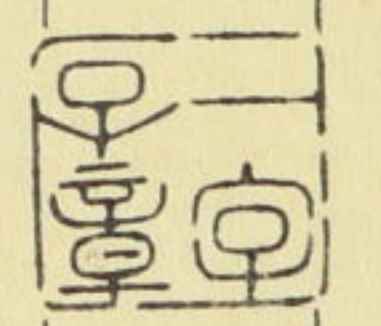
洞窟藪野山林郊野之問草木之多
 甲冑皆泥其性而英莖其花結實
 者亦不勤也其是以東山水好風雅
 之人折取其葉枝之艷絕乎者
 來而投諸其席之瓶裏其用
 悅目為神翁之謂活花焉其術之

始實起子 东山相府公 相公極其
妙定其法也時者 千葉就卜先生之
先現日其教以傳至于今也先生
姓平族子業名胤綱字就卜號松
明齋播磨赤穂之人也嘗遊於
於大和撰津之官以廣其傳焉後奉
于京都而其在業愈不懈焉

先生之於活花也枝葉不細不教從
點者態而教其妙致而法居於在事
山水之所見自然之風景其術以出
乎人之言之外為要矣余從于先生
而學子漸獲其趣焉 先生居處
著其書一篇而示于門人遂上諸
梓以貽子後也於其 乎跋焉

明和二年乙酉三月

門人五陵柳島源去俊



校合 東都

林華徑
丹羽墨川
和田雲阿

後編 後起

浪華

八幡泰幾
益子沾千
後藤龍波
奥村峯柴

源氏活花百瓶之圖

後編

源氏活花百瓶之圖

門人 全二冊
花形 出来

京都 彫工 田中平兵衛

明和二年乙酉中秋望日

東雲堂藏



生内如茂
種野茂右衛門藏書

